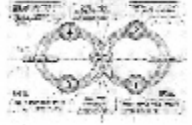
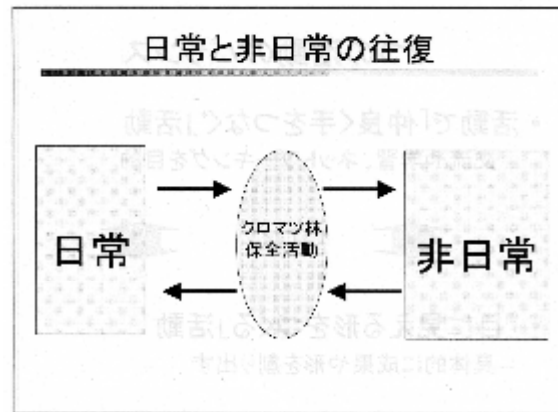


でなく、どれでも同じですね。会の実績を優先すると会メンバーの親睦度が低下して、親睦を優先すると会の活動成果が低下する。簡単ではない課題です。

さらに先ほども言いましたが、できるだけ多くの人に参加していただければいいということもポイントです。環境保全活動は様々な知恵や知識が必要ですから、活動の内部の「持ち駒」が多いに越したことはありません。この時に大切なことは、「新しく入った人に文句を言わない」ということです。長老的な人が、「このようなことは10年前にやったけど、うまくいかなかった。」などと言わず、「10年前と状況が違うのだから、まずやってみましょうか。」と言える状況がないと会の運営はうまくいきません。新たに参加してくる人が面白くないからです。

### 地域にたくさん店を開く

- 店(=書店)は多いほどよい
  - 多様な人に参加を求める
- 開店のリスクを下げる
- 楽しさ(非日常)の演出


もう1つは、活動に非日常があるかどうかということです。日常の活動は大事ですが、なかなか辛いものがあります。日常生活の自分の家の裏庭の手入れとかは、あまり面白いものではありません。これが、何か発見があると、例えば「この季節だとこんな素晴らしい里山の紅葉が見られる」とか、非日常があると素晴らしいものになります。

ところが、「非日常」に行ったままで、日常に戻らないと生活は成り立たないので、どこかで戻してやらないといけません。クロマツ林保全活動というのは、ある意味で日常見慣れてしまったクロマツ林を、「こういう活動ができるのですよ」と非日常の演出をしてみなさんを楽しませる。そして、また戻ってきてくださいよ、ということを行っていることになります。

もう1つ、中を取り持つ人、「歌って踊れる公務員」はこれからぜひ必要です。公務員しかできない人よりも、こういう人を雇った方がいい。そしてもう1つ、分かり易く説明してくれる人、自分達の活動を1歩離れて説明できる人が必要です。自分達の活動を自分達でいいよといっても誰も見向きをしません、自分たちの活動をちょっと離れて説明すると、活動というのはいまよく伝わるのです。こういう説明のできる人が必要となってきます。

### 重要な二つの役割

- インタメディアリー(仲人)
  - ネットワーク化を促進
  - NPOでは中間支援組織
- インタプリター(通訳)
  - 地域からのメッセージを伝える
  - 外部にアピールする



### 形を作る、それを見せる

- 「形にして」外に発信する
  - ポスター・パンフレット・エコツアー……
- 発信しなければ外から見えない
  - 「外」とは自分たちの活動の外
- 発信で新たな参加者を得る

形、成果を作ると言いましたが、形というのは保全活動だけではありません、ポスター、パンフ

レット、会からの通信なども含まれます。ここでのポイントは、「発信しなければ外には伝わらない」という点です。どんなにいい活動をして、新聞・テレビ等で報道されなければ、知っているのは参加した人だけになります。参加していない人に参加を促すのが目的ならば、参加をしていない人に向かって発信してください。今回のシンポジウムも、メンバー以外の人に参加を促すのが目的だといいでしょう。

それで「どのように発信するか」ですが、商品パンフレットが参考になります。大体、商品パンフレットは三部構成でつくられています。デジカメやテレビのパンフレットを思い起こしてください。表紙は「イメージ」で、中を開くと、「この商品を買うとこういうメリットがありますよ」ということが書いている。最後に、型式、奥行きは何センチ、何ワット消費しますと言う「スペック」が書いてある。

この「スペック」を見るのは一部のマニアだけです。ここに一生懸命になっても一部のマニアにしか伝わらない。スペックではなく、メリットを示すことも必要です。さらにもっと大勢の人はメリットよりもイメージに惹かれますからメリットよりもイメージにウエイトを置かなければならないでしょう。

おかしい話しですが、「健康になるなら死んでもいい」という言葉がこれを説明してくれます。健康という言葉の「イメージ」は非常に浸透力がある。人の行動を変えてしまう。ですから、みなさんがクロマツ林の保全で勝負をするのであれば、「クロマツ林は何百年の歴史があって、こんな保全機能を持っていて・・・」という「スペック」言葉よりも、1回の「クロマツ林は私たちの心のふるさと」という「イメージ」言葉の方が浸透するかもしれないのです。ただしポイントは、いきなり「クロマツ林はこころのふるさと」などと言っても全然説得力がなく、そのベースとしてスペックがきちんと整理されていてはじめて「クロマツ林はこころのふるさと」という言葉が説得力が増すのです。

さて、私は今日ここに「よそ者」として参っております。通常よそ者というのは「風の人」とも言われ、「よそからやってきた人」ですが、ある意味では、ドンキーホーテのように普通の人がないことをやる人でもあります。あの人はよそ者だからあんな馬鹿なことをするのだと言われることがあるのはそのためです。

このよそ者に対する考え方は2つに分かれます。それは「あいつはよそ者だから、風の人だからすぐ行ってしまおう」、また「よそ者があんな馬鹿なことをして」という否定的・現実的な考え方と、「よそ者は優れているから受け入れて良い点を吸収してやろう」という「よそ者礼賛」パターンに分かれます。



**新たに加わる者＝よそ者とは何か**

- 「よそ者、ばか者、若者」
- 「風の人」(「土の人」に対する)
- 「他者のまなざし」を持つ(菊地,2002)
- セルバンテスの『ドンキホーテ』
  - 「超える部分」・「他者性」を過剰に示す
  - 内部で通用する常識のウソを示す

**よそ者に対する見方**

- 「招かれざる客」
  - 否定的な評価
  - 地域の自給自足主義
- 「現実的な考え方」
  - 優れた「よそ者」であれば受け入れる積極的な視点
  - 最近のまちづくりに見られる肯定的な評価

よそ者への期待には、「地域の人を持っていない技術や技能を持ってきてくれる」、「地域の持っている知識をわかりやすく表現する」、「地域のしがらみを越えて何かする」等があります。このようなことは「よそ者効果」と言われるものです。また、よそ者は地域の外から必ず来るのではなく、地域の中にもいます。地域の中で本を読んだり学習したりして、ある日「よそ者」の感覚を身につけてしまう、いわば「地域内よそ者」もいます。

さて、よそ者が地域を変えるという話ですが、地域が変わると同時に、よそ者も変わっていくのが普通ですね。両者が一緒に変われる関係ができれば非常に素晴らしいものとなります。その時によそ者の言うことを「はい、はい」と聞いているだけではいけません。あくまでも地域側とよそ者は対等であり地域側から「地域のしきたりはこうだ」と説明できるくらいの対等な関係が必要です。

ここまで、地域が自律的にやるのが大事だよと私は言ってきましたが、これは残念ながら「目標」にはなりません。幸せな結婚というのが目標にならないのと同じです。幸せな結婚を目標にして毎日暮らす方はほとんどいない。ただ、結果的に幸せな結婚をする人はたくさんいる。つまり「自律的な地域をつくること」は目標にはならないけれども、結果的に地域が自律する例はいくつもある。結婚と同じで、プロセスが大事です。プロセスをどう充実させるかを目標にしていれば、自然に幸せな結婚になるのでしょうか。

**よそ者効果**

- ①技術や技能などの知識の地域への移転
- ②地域の持つ創造性の励起
- ③地域の持つ知識をわかりやすく表現
- ④地域(や組織)の変容の促進
- ⑤しがらみ抜きの問題解決の提案

**自律的な地域は目標ではない**

- ・「地域の人々が地域の資源や環境を持続可能な範囲で利用する」
- ・「幸せな結婚」は目標にはならない、結果的にそれが得られることはある  
敷田(2006)

最後に、専門家とお付き合いについてお話をして講演を終えたいと思います。私は専門家として、よそ者として今日ここに来ているわけですが、このように「専門家を呼ぼう」という場面が地域の環境保全でも増えています。なぜかという、まず地域の中にも専門家がいますが、なかなか地域の中で解決できなくて、ほかから専門家を呼ぶということがあります。次に「環境問題が複雑化してきているので、専門家に調査・分析してもらいたい」、また「科学的に説明しないと住民が納得しないので専門家にしてもらいたい」などと言う背景があるからです。

そのためこうした専門家例が増えてきています。ある意味では困ったことですね。

しかしそれが避けようがないのなら、地域の皆さんが専門家とどうお付き合いをしたらいいのかを知っているかどうか重要です。だからクロマツ林保全でも、専門家がこれからも関わってくるでしょうし、専門家とどうお付き合いするかということは、クロマツ林の保全に大きく影響を与えるでしょう。

**よそ者としての専門家の役割**

増え続ける専門家のかかわり……

- ①地域の人材不足
- ②地域外からの利用者・お客の増加
- ③地域内での問題の複雑化・高度化
- ④科学的調査、住民への説明機会の増加

そこで、地域と専門家との「関わり」について私の考えで4つに分けてみました。1番目は、これは一番よく見られる専門家の関わりかたで、「出前を取る」というパターンです。専門家が「専門知識を出前」してくれます。例えば、今日の私のように講演をしてくれます。講演をして、偉そうなことを言って、はいさようならと帰っていきます。これは、みなさんに飴をみせて、「美味し

いよ」と言って、香りを嗅がせただけで持ち帰るようなものです。みなさんにはおそらく何もメリットもありません。出前を取り続けると「生活習慣病」になりかねません。

専門家のかかわりの分類	
タイプ	内 容
①出前(ビジター)モード	専門家が対象地域で行う講演やシンポジウムへの参加、技術指導などの 専門的知識の伝授
②調査・研究対象モード	専門家が地域を調査・研究対象として認識し、短期から中期にわたり、調査者として地域にかかわる
③一体同化モード	専門家が地域住民といっしょにさまざまな活動を進め、問題解決に邁進し、地域のネットワークに深くかかわる
④解決力向上モード	地域が主体的に問題解決できるように、解決力そのものの向上を専門家が支援する 地域住民が環境問題を①見出し、②調査し、③解決策を創出するプロセスに、専門家として「参加」する

次に2番目です。専門家がみなさんを研究対象と見て調査研究します。しかし、調査が終わるとさようならと帰ってしまうパターンです。彼らは帰って研究成果を学会で発表したり、講義で説明したりするわけですが、地域には何に報告もありません。地域は調査対象となるだけで、これも困った物です

3番目は少しまで、「一緒にやりましょう」という専門家です。人情味あふれる専門家もいるので、地域に深く関わってくれます。しかし、「地域にとって何が一番いいか」を考えるのではなく、専門家の「やりがい」が優先してしまうことも多く、これも地域にとっては十分ではありません。

一番地域にとって望ましい関わりは、実は4番目の「解決力向上型」の専門家です。解決力向上型専門家とは、地域が自分の力で解決していくことを支援していく専門家のことです。例えば「こういう解決方法があるがやってみないか」、「こういう方法がある、ああいう方法もある」、「こういう専門家がいるが紹介しようか」という支援をする「優れた町医者」のような専門家に出会えれば一番いいわけです。

地域への専門家のかかわり	
タイプ	わかりやすい説明
①出前(ビジター)モード	医者が診察なしで処方箋を出す
②調査・研究対象モード	医者が診察だけして患者から離れる
③一体同化モード	医者が診察はするが、患者と相談せずに一方向的に治療を進める
④解決力向上モード	医者が患者の体質改善を試みながら、治療力そのものを高めていく

1-4の説明が難しいので、次のように言い換えてみます。1番の「出前モード」は、医者が診察もせず薬を出す。地域の状況を見ずにああしたほうがいい、こうしたほうがいいということです。2番目の「調査・研究対象モード」は、「診察だけして治療せずに帰る」ことです。帰って、こん

な難しい病気がありましたと学会に報告する。3番目は「インフォームドコンセント」なしで、「とにかく俺が直す、信じてついてこい」という「一体同化モード」です。医者が一方的に病気を治すことが、必ずしも患者にとって幸せではないと最近言われていますね。残念ながらそうですね。だから3番目もどこか問題がある。そして4番目です。時間はかかるけれども、患者とお付き合いして、患者の「治癒力そのものを向上」させる医者です。このような医者が望ましいのですが、残念ながらこのような医者、専門家を見つけるのは簡単ではありません。

ともすれば、「出前」をする、講演だけで帰ってしまう、入口だけで帰ってしまう人が多い。また、調査研究だけして、調べて帰ってしまう人も多い。3番目の人情味あふれる専門家ですけれども、その専門家がなくなるとそれで活動は止まります。専門家がずっとそこにいてくれる保障は全くありません。ある時、急に「やめた。」といわれたら地域の人はずたまりません。「いままで一緒にやろうと言っていたのになんで？」そうすると地域は何もできない状態におかれる。

しかし4番目だと、「地域が自分で治す力」が備わる。だから仮に専門家がどこかに行っても地域は次の専門家を呼ぶことができる。みなさんのほうが一枚上手であれば、専門家を上手に使うことができる。例えば「このことなら、あの専門家を呼んで話をさせよう」とか、専門家を「うまく使う」ことができます。最終的には4番をよしとするのが私の持論です。

さて本当に最後ですが、では「今すぐ何をすればいいのか」ということです。これは結構簡単なものでして、まず「あるべき姿」を思い描くことです。それと「現在の姿」を比べて引き算すれば、「すべきこと」が見えてきます。今、みなさまの活動を拝見しますと、いたる所に「あるべき姿」は見えてきていると思います。ただ、今の段階ではみなさんにそれが十分共有されているとは思えません。そのためにはクロマツ林の将来の姿、「あるべき姿」が明確にされることが必要です。それはいわゆる「ビジョン」ということになりませんが、それを持つ時期に来ていると思います。

今日は、地域と環境保全という題で、活動はどのようにすれば進むのか、また、そこから得られるものは何かについてお話しました。そして、最後になりましたが、これから、皆さんが専門家とどのようなお付き合いをしたらいいのかについてお話をし、私のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

